# 28［小説］『』

　①あの、神門をってを正面に見、西の廻廊から神苑に第一歩を踏み入れた所にある数株の――海外にまでその美をわれているという名木の桜が、今年はどんな風であろうか、もうおそくはないであろうかと気をみながら、毎年廻廊の門をくぐるまではあやしく胸をときめかすのであるが、今年も同じような思いで門をくぐった彼女たちは、たちまち②夕空にひろがっている紅の雲を仰ぎ見ると、皆が一様に、「あー」と、感嘆の声を放った。この一瞬こそ、二日間の行事の頂点であり、この一瞬の喜びこそ、去年の春が暮れて以来一年にわたって待ちつづけていたものなのである。彼女たちは、ああ、これでよかった、これで今年もこの花の満開に行き合わせたと思って、何がなしにほっとすると同時に、来年の春もまたこの花を見られますようにと願うのであるが、幸子一人は、来年自分が再びこの花の下に立つには、恐らく雪子はもう嫁に行っているのではあるまいか、花の盛りは廻って来るけれども、雪子の盛りは今年が最後ではあるまいかと思い、自分としては淋しいけれども、雪子のためにはどうぞ③そうあってくれますようにと願う。正直のところ、彼女は去年の春も、の春も、この花の下に立ったときにそういう感慨に浸ったのであり、そのつど、もう今度こそはこの妹とを共にする最後であると思ったのに、今年もまた、こうして雪子をこの花の蔭に眺めていられることが不思議でならず、何となく雪子がましくて、まともにその顔を見るに堪えない気がするのであった。

　桜樹の尽きたあたりには、まだ軟らかい芽を出したばかりのａ楓や樫があり、円く刈り込んだｂ馬酔木がある。貞之助は、三人の姉妹や娘を先に歩かして、あとからライカを持って追いながら、のｃ菖蒲の生えた汀を行くところ、のの石の上を、水面に影を落として渡るところ、の西側の小松山から通路へ枝をひろげているｄ一際見事な花の下に並んだところ、など、いつも写す所では必ず写していくのであったが、でも彼女たちの一行は、④毎年いろいろな見知らぬ人に姿を撮られるのが例で、ていねいな人はわざわざその旨を申し入れて許可を求め、な人は無断でをうかがってシャッターを切った。彼女たちは、前の年にはどこでどんなことをしたかをよく覚えていて、ごくつまらないなことでも、その場所へ来ると思い出してはその通りにした。

　「あ、お母ちゃん、お嫁さんやわ」

と、突然悦子が声を挙げた。見ると、神前結婚をすました一組がから出て来るところで、花嫁が自動車に乗り移るのを、野次馬どもが両側に並んでき込んでいるのである。こっちからは白い角かくしと、きらびやかなの後姿が、ｅ硝子戸の中でちらと光ったのを見ただけであったが、実は此処でこういう一組に行き合わすことも、今年が初めてなのではなかった。そして、⑤いつでも幸子は何か胸をかれるように感じてその前を通り過ぎるのであるが、雪子や妙子は案外平気で、時には野次馬の中に交じって花嫁の出て来るのを待っていたり、花嫁がどんな顔をしていたとか、どんな衣裳を着ていたとか、あとで幸子に話して聴かすのであった。

●語注

神苑＝神社の境内にある庭園。ここでは平安神宮の庭園。

紅枝垂＝紅色の花の咲く、枝が垂れ下がった桜。

ライカ＝写真機のブランド名。

裲襠＝帯をしめた上から掛ける、裾の長い衣服。結婚式などで使う。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅの漢字をひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①はどの言葉にかかるか。本文中から五字以内で抜き出せ。4点

〔　　　　　　　　　　〕

問２　傍線部②とは何のことか。本文中の語句を用いて説明せよ。5点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部③とは何を願っているのか。簡潔に説明せよ。5点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部④について、なぜ見知らぬ人にまで写真を撮られるのか。理由を説明せよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　本文中には次の一文が抜けている。一文が入る直前の五字（句読点は除く）を答えよ。5点

たとえば栖鳳池の東の茶屋で茶を飲んだり、楼閣の橋の欄干からにを投げてやったりなど。

〔　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部⑤はなぜか。理由を本文中の語句を用いて説明せよ。12点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　次の図は登場人物の関係図である。空欄に人物名を入れよ。3点×4

［　　Ａ　　］

　　　　＝─［　　Ｄ　　］

┌［　　Ｂ　　］

┼［　　雪子　］

└［　　Ｃ　　］

Ａ〔　　　　　　　　〕　Ｂ〔　　　　　　　　〕　Ｃ〔　　　　　　　　〕　Ｄ〔　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａかえで　ｂあせび（あしび）　ｃしょうぶ　　ｄひときわ　ｅがらすど

問１　紅枝垂（３字）

問２　満開に咲いた紅枝垂桜の花

問３　雪子が嫁に行くこと。

問４　Ａ彼女たちの姿が美しく、周りのＢ風景とあって絵になるから。

　　（Ａの内容がなければ×、Ｂの内容がなければ５点減点）

問５　通りにした

問６　Ａ花嫁を見ると、Ｂ嫁に行けない雪子のことが傷ましく思われるから。

　　（Ａの内容がなければ５点減点、Ｂの内容がなければ×）

問７　Ａ＝貞之助　Ｂ＝幸子　Ｃ＝妙子　Ｄ＝悦子

■覚えておきたい語句

□2　謳われる………………多くの人から褒めたたえられる。

□2　気を揉む………………あれこれと心配して悩む。

□12　行を共にする…………一緒に行動する。

□20　不躾……………………礼儀作法をわきまえないこと。無作法。無礼。

□27　胸を衝く………………さまざまな思いがつのる。

〔場面解説〕

　幸子たち三人の姉妹、幸子の夫貞之助、幸子の娘の五人は、毎年恒例の平安神宮の紅枝垂を見に訪れる。幸子は、花の下で来年は雪子が嫁に行き、雪子と花見に訪れるのも今年が最後ではないかと毎年のように思いながら、まだ嫁に行かない雪子を心配する。やがて、一行は庭園を散策し、写真を撮ったりする。

〈作者＆出典〉谷崎潤一郎（たにざき・じゅんいちろう）一八八六年（明治19）〜一九六五年（昭和40）東京生まれ。小説家。第二次「新思潮」に発表した『刺青』『』が永井荷風の激賞を受け、一躍文壇に登場する。代表作に、『の愛』『ふ虫』『吉野』『盲目物語』『春琴抄』『』など。本文は、『細雪』（新潮文庫、一九五五年）より。大阪船場の旧家の四姉妹を中心に描いた、作者の代表作である。「源氏物語」的な王朝世界の情緒を、現代風に描いた作品とも言われている。

【読みのセオリー】

★登場人物を把握する

　登場人物がだれとだれか、彼らの年齢・性別・性格・特徴……、また相互の関係はどのようなものか。

　すべてが明確に説明されたり書かれているわけではない。が、個々の表現に注意すれば、ある程度は明らかにできる。

■読みのセオリー［実践］登場人物を把握する

問７　小説は、まずどのような視点から語られているかを考えよう（同じ番号には同じ言葉が入る）。

　本文では、主に［１　　　　］の視点から語られている。

［１　　　　］から見て雪子は［２　　　　］。

また悦子は、［１　　　　］に「お母ちゃん」と声をかけていることから、［１　　　　］の［３　　　　］とわかる。

〔解答〕　１幸子　２妹　３娘

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問３　12行目「この妹と行を共にする最後であると思った」とあるが、なぜこのように思うのか。そこに幸子のどのような気持ちが読みとれるか説明せよ。

　［答］　妹の雪子の結婚を願う気持ち・雪子が嫁に行くことを願う気持ち

＊差し替え

問７　24行目「悦子」の母にあたるのはだれか、答えよ。

　［答］幸子

＊◆漢字１として新問

◆漢字２　本文中の傍線部１〜５の漢字の読みをひらがなで記せ。

１　気を揉みながら、

２　何となく雪子が傷ましくて、

３　ごくつまらない些細なこと

４　胸を衝かれるように感じて

５　どんな衣裳を着ていたとか、

　［答］１も（み）　２いた（ましい）　３ささい　４つ（く）　５いしょう